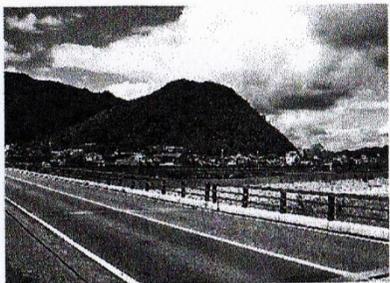


5. 三木露風と龍野

(1) 旧龍野城下

JR姫新線「本竜野駅」から「旧龍野城下」をめざす。城下の一番西奥、龍野出身・矢野勘治作詞、旧制第一高等学校寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』の歌碑のある龍野公園まで約4km近くあるので、いつもはタクシーに乗る。掛保川を渡る龍野橋まで来ると、車窓右手に四季を通じて緑の色濃い原生林である鷄籠山けいろうさんがとりかごを伏せたような形でどっしりとうずくまっで見える。

この山の麓、小高い見晴らしのよい台地に、寛永年間、信州飯田から移封してきた龍野藩初代藩主脇坂安政（堀田氏から養嗣子）が館を築き、それは明治四（1871）年の廃藩置県まで五万三千石の龍野城として存続。脇坂家



■鷄籠山（龍野橋からの遠望）

る。

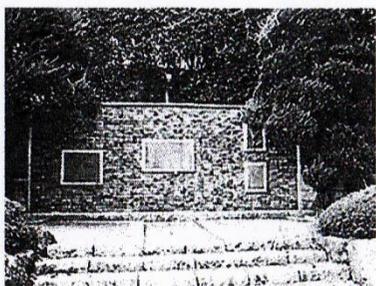
(2) 三木露風と『赤とんぼ』

龍野公園から旧城下を巡る散策路の取っかかりに、三木露風の『赤とんぼ』の歌碑がある。露風は明治22（1888）年三木節次郎の長男として霞城町（龍野城のすぐ下）で生まれた。

始祖、安

治は賤ヶ岳七本槍の一人であった。祖父制は百石取りの龍野藩士（寺社奉行）であり、明治維新後は初代の龍野町長。地元じよんの九十四銀行（神戸銀行の前身）の頭取にもなった。

露風は七歳頃から祖父より漢文の素読を授けたという。しかし、父の身持ちが悪く、家庭の不和からカタ（鳥取藩家老和田家次女）は露風が七歳のとき離婚し、弟勉を連れて鳥取へ帰った。早熟で多感な露風は孤独に耐えながら、鷄籠山など龍野の山河を逍遙し、寂しさを癒した。彼にとって母が離婚して去って行った、祖父宅近くの紅葉谷から両見峠への道は、帰らぬ母を待つ母恋いに繋がる原風景であった。やがて勉学より詩歌の世界に埋没し文士気取りの露風は上級生たちからいじめを受ける。将来を心配した祖父制は彼を岡山藩の藩校であった閑谷学校かんこがっこうに転校させたが、



■『赤とんぼ』の歌碑

作品の中に色濃く現れる恋人、太田小茂与の存在もあって、さらには詩への情熱は燃えさかり、処女詩集『夏姫』を出したが、勘当同然の状態で小茂与を誘うが叶わず独り寂しく上京した。

そんな孤独で寂しい境遇で育った露風にあって（財）霞城館発行の『三木露風』によると、『赤とんぼ』の主題は、山崎から奉公に来ていた△母のいなくなった寂しさを埋めるように慈しんでくれた、姐やに対する思慕の情である△という「誰に負われて論争」が問題になっている。露風の講演記録などから露風を負っていたのは、姐やであるらしい

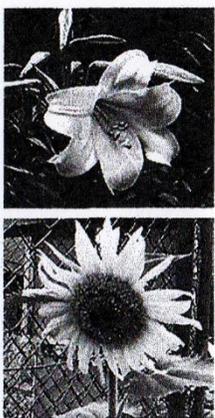
が、この歌詞に流れる思いはやはり姐やより母への思慕が大きいのと思われることや『赤とんぼ』の歌詞の推敲の経緯から、『三木露風 赤とんぼの情景』和田典子の考察と同じく『赤とんぼ』はやはり母恋いの歌だと野元も思う。

(3) 三木露風の恋物語

和田典子の『三木露風 赤とんぼの情景』によると、露風は作品を谷、川、泉、湖、海など水に関する作品にある種の神秘性を感じるといふ。そして水に関するキーワードの作品を並べてみたところ、水辺で長い髪を梳く姫（水姫）と露風の恋物語が浮かび上がるといふ。ひとりは昭和15（1940）年に龍野藩歴代藩主上屋敷跡の「聚遠亭」の池畔奥に建立された「ふるさとの」詩碑に詠われた「少女子」。（この詩碑は風化が著しく読みにくい。この少女子も小茂与説あり）

ふるさとに帰り来てなつかしき人
あまた見つけ詩碑の建ちし日

詩碑除幕の日、露風は帰省して左の歌を詠んだ。もうひとりの「少女子」は閑谷の森で愛した女性のことだ。露風にとって忘れ得ぬ人であり、与謝野晶子の影響からか小茂与との恋を「白百合」と「向日葵」に託して歌を詠んでいる。



- * 最終稿の『赤とんぼ』の歌詞は、
1. 夕焼け小焼け／赤とんぼ／負われてみたのはいつの日か（↑初出はまほろしか）↑母の思い出
 2. 山の畑の／桑の実を／小籠に／つんだは／まほろしか（↑初出は、いつの日か）↑母の思い出
 3. 姐やは十五で／嫁に行き／お里のたよりも／絶えはてた↑母の代替
 4. 夕やけこやけの／赤とんぼ／とまってるよ／竿の先↑母との思い出（和田典子の『三木露風 赤とんぼの情景』より）

(く) (く) (く)